



Title	内モンゴル自治区における日本語専攻学習者の動機づけに関する考察 : 内モンゴル自治区のA大学を対象に
Author(s)	張, 立偉
Citation	大阪大学言語文化学. 2016, 25, p. 81-94
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77734
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

内モンゴル自治区における日本語専攻学習者の動機づけに関する考察*

—内モンゴル自治区のA大学を対象に—

張 立偉**

キーワード：日本語専攻学習者、動機づけ、民族による動機づけの違い

众所周知，日语学习者每年都在不断增加，根据国际交流基金会 2012 年的调查显示，中国日语学习者人数已经超过韩国，成为全世界第一。同时根据同调查的结果显示，日语教材的不足以及学习者的学习不热心成为众多问题中最严重的。学习者抱着什么样的目的开始日语学习是一个非常重要的问题，但是，根据劉（2009）的调查显示，在中国关于日语学习者的学习动机的研究却很滞后。

但是另一方面，关于语言学习者的动机研究，从 19 世纪 50 年代开始，以 Gardner 为中心开始的。以 Gardner 为首的研究者们把学习者的学习动机分为“道具型动机 (instrumental motivation)”和“综合型动机 (integrative motivation)”。现代的关于语言学习者的学习动机的研究，主要沿袭了 Gardner 的理论，并对其进行细分。另一方面，不仅是关于学习动机本身的研究，学习动机与学习者的学习成绩存在着怎样的关系，与学习动机本身存在着怎样的关系也成为当今学习动机研究的热点。

本文作者在 2011 年，以中国某所大学日语系三年级的学生为对象，做了「日语学习的动机是否下降」的问卷调查。调查显示，调查对象的 82 人中，有 68 人回答日语学习动机是下降的。同时，回答下降的调查对象中，汉族学习者的人数要远远超过蒙古族的日语学习者，为了调查为什么会有这种现象出现，本文作者以位于蒙古族集中居住的内蒙古自治区的 A 大学的日语系的学生为对象，运用 Ryan 的调查方法，进行了问卷调查。调查问卷由内在学习动机，外在学习动机和独立项目三个部分组成。

本次的调查显示，不管是汉族日语学习者还是蒙古族日语学习者都对日语学习抱有较高的学习动机，但是相对于汉族日语学习者，蒙古族学习者的学习动机比较高。同时，在外在学习动机的周围环境与父母支持的两项上，两组之间出现了明显的差别。在中国，与汉族相比，蒙古族的就业环境要受到一定的限制，同时父母及周围的环境对学习会产生一定的影响，这可能会导致这种差别的出现。同时，在独立项目的关于学习外语的自信上，也观察到两组有明显的差别。蒙语与日语不仅是在语法上非常相似，发音也非常相像，

* 关于内蒙古自治区日语专业学生的学习动机的调查 (张立伟 (ZHANG Liwei))

—以内蒙古自治区 A 大学为研究对象—

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

因此有可能导致学习者在学习日语时自信不同的情况出现。同时，本文作者也希望以这次调查结果为契机，来重新思考现在中国的日语教育以及日语教育课程的设置。

1 はじめに

中国は56の民族から構成されており、13億5千万人以上の人が住む世界一人口が多い国である。その中で漢民族は全人口の約92%を占めている。そのほかの55の少数民族が残りの約8%を占めている。55の少数民族の中で、比較的大きな民族集団としてモンゴル族（約500万人）や朝鮮族（200万人）などがあげられる。中国では漢民族だけではなく、ほかの少数民族の経済や教育などを向上させるために、様々な政策が実施されている。例えば、次代の人に少数民族の言語を受け継がせるために、同民族の言語で教育を行わせたり、大学入試で少数民族であれば点数に5点をプラスしたりしている。また、少数民族が就職しやすいように、少数民族の民族言語だけではなく、中国語や英語などの言語教育も実施されている。

また、少数民族の権利を最大限に守るために、行政単位の省の代わりに少数民族が居住する地域で自治区¹を設置している。内モンゴル自治区を始め、チベット自治区や新疆ウイグル自治区などの五つの自治区²が設置されている。今回の調査対象となる内モンゴル自治区では近年、日本語教育が盛んに行われており、その中に異なる環境で育った漢民族学習者とモンゴル族学習者が存在している。また、環境だけではなく小さい頃から使う言語も異なり、これも学習者が日本語学習を始める際に、影響を与えると考えられる。本稿では漢民族とモンゴル族を合わせた学習者の動機づけを考察した上で、民族によって学習者の動機づけに差が生じているかどうかについても考察を行う。

2 先行研究と本研究の目的

教育現場に立つ者なら、誰でも学習者が学習を始めようと思った理由について考えた経験があるだろう。その理由をいかに維持しながら、最終の目標に近づかせるかは教師が直面しなければならない問題であろう（守谷2002）。動機づけは第二言語学習においては学習者を目標に導く重要な要因の一つであると考えられる（Oxford1996）。Dörnyei（1998）は十分な動機づけなしでは、最も長期の学習目標を達成することができないと述べている。

第二言語習得における学習者の動機づけの研究はGardnerらによって始められ、彼らを中心に進められてきた。彼らの研究調査の結果により、学習者の動機づけは道具的

¹自治機構を有する区の名称である。

²内モンゴル自治区、広西チワン族自治区、チベット自治区、新疆ウイグル自治区、寧夏回族自治区。

動機づけ (instrumental motivation) と統合的動機づけ (integrative motivation) に分類された。統合的動機づけとは目標言語の社会や文化などに興味があり、また、その社会に溶け込みたいという学習動機であるのに対し、道具的動機づけとは、入学や旅行のため、また、就職のためといったような目標言語をあくまでも道具の一種として学習する動機である。彼らの理論を援用した日本語学習者の動機づけに関する研究は数多くなされてきたが、その中で動機づけを細分化する研究が多い。成田 (1998) はタイの大学生を対象に、動機づけを Gardner らの理論を踏襲した上で統合的志向、誘発的志向、利益享受志向などに分類した。また、郭・大北 (2001) の研究では、シンガポール華人大学生の動機づけを統合的動機づけとエリート主義と道具的動機づけに分類している。

また、動機づけが学習者の成績にどう関わるかについての研究も多くなされてきたが、調査対象によって、道具的動機づけが強い方が成績が高かったり、統合的動機づけが強い方が成績が高かったりするため、一致した結論には至っていない。堀越 (2010) は台湾における日本語学習者にアンケートを行ったところ、日本や日本文化について知りたい、楽しみたいという統合的動機づけが強い方が成績もそれに比例して高い傾向にあると指摘している一方で、学習成果に関連があるのは統合的動機づけか、道具的動機づけかは一概には言えないとしている。また、郭・全 (2006) は中国ハルビン理工大学の日本語学科の学生を対象に動機づけを調査したところ、就職のためという道具的動機づけが強い学習者の成績が高いと述べている。

一方で、中国人日本語学習者を対象とした研究はまだ少ないと言わなければならない。劉 (2009) によれば、1999 年から 2008 年の間に、中国で日本語教育に関する研究はさまざまな分野で行われている。特に、日本語教育カリキュラムと改革については最も多く、研究全体の 22.73% を占めている。その次は日本語知識教育 (音声、ボキャブラリー、文法、歴史、文化) と日本語能力教育 (聞く、話す、読む、コミュニケーション) であり、それぞれ、全体の 20.45% と 13.64% を占めている。中国では、日本語に関するカリキュラム、日本語の知識と 4 つのスキルに関する研究が最も盛んに行われていることが分かる。しかしながら、日本語教師や日本語学習者を対象とした研究は少なく、全体のわずか 3.41% (6 本) を占めているだけである。この 6 本の中で、学習者を対象とした研究は 3 本で、2 本は語彙習得に関する研究、学習者の動機づけに関する研究は 1 本のみであった。残りのうち 2 本は教師が教室でどのような役割を果たしているかに関するものだった。学習者を中心とする動機づけの研究は中国ではそれほど進んでいないといえるだろう。

しかしながら、筆者が 2011 年に中国のある大学の日本語専攻学習者の三年生に「日本語学習に対するモチベーションが低下しているか」というアンケート調査を行ったと

ころ、82人のうち、68人が「低下している」と答えており、その主な原因としてカリキュラムに問題があるということが分かった。日本語教育カリキュラムが日本語学習者の動機づけに影響を与えており、日本語教育カリキュラムを考える際に学習者の動機づけは無視してはならない要因の一つであると考えられる。また、国によって日本語学習者の動機づけが異なるが、同じ国の中でも異なる背景を持つ学習者集団も数多く存在しており、日本語教育カリキュラムを設計する際に学習者の異なる動機づけをも考慮しなければならない。

以上の問題点を踏まえた上で、本稿ではまず、従来の動機づけの枠組みを利用し、中国における日本語専攻学習者の動機づけの様子を明らかにしたい。また、中国においてさまざまな背景（言語、生活環境、居住地域など）を持つ学習者が存在しており、今回の調査対象であるA大学における日本語専攻学習者を漢民族学習者とモンゴル族学習者がいるため、それぞれの動機づけを明らかにした上で、民族を一定の指標として、日本語専攻学習者を取り巻く生活環境がその動機づけにどのような影響を与えているかを検討したい。最後に、日本語教育カリキュラムを設計する際に学習者の動機づけがどのような影響を与えているかについて検討する。

3 調査概要

日本語専攻学習者の動機づけの現状を調査するために、筆者は2013年9月22日から9月26日まで、A大学外国語学院日本語学科に在籍する学習者を対象にアンケート調査を行った。本調査は研究以外には使わないことと成績などに一切関係ないことを先生に伝えてもらい、学習者の承諾を得た上で授業後に実施した。

3.1 A大学

A大学は中国内モンゴル自治区のフフホト市にある総合大学であり、1957年に中国国家教育部により創立された。A大学は内モンゴル自治区において初めて少数民族で設立された大学であると同時に、内モンゴル自治区では唯一の“211重点大学³”である。A大学は内モンゴル自治区の教育を牽引する大学であると言っても過言ではない。現在、A大学はモンゴル学を始め、経済学部や外国語学院など21個の学部が設置され、学部や院生を毎年7000人程度受け入れている。

A大学外国語学院は1990年に設置され、その前身は1978年に設置されたA大学外

³ 211工程（にいちちこうてい、英語：Project 211）は中国教育部が1995年に定めたもので、21世紀に向けて中国の100の大学に重点的に投資していくとしたもの。これら大学は「211工程重点大学」あるいは「211重点大学」と呼ばれ、それまでの「国家重点大学」という言葉に取って替わった。

国語言語文学学科であった。これまで、A大学外国語学院は37年間を経てきた。日本語学科は1979年に設置され、A大学外国語学院とともに発展し、2015年まで36年の歴史を築いている。現在のA大学においては学習者の数も教師の数も30年前より大幅に増えてきた。日本語に関する授業の種類も豊富になっている。それと同時に、教育手段もデジタル化され、パワーポイントなどのプレゼンテーションツールを使いながら、授業を進めるのが主流となっている。現在、A大学の日本語学科には教師が20人おり、その内、教授は3人、準教授は6人、博士学位を持っている教師は8人である。中国人の日本語教師全員が日本で学習した経験があり、日本の大学を卒業した教師も少なくない。教師の質という面から見れば、教師の資質も高くなり、教育水準も上がってきていると思われる。中国人の教師のほかに日本人の教師は4人であり、学年ごとに1人の日本人の教師が日本語の会話を担当している。A大学は学生の日本語の能力を高めるために、さまざまな努力をし、よりよい学習環境や教師を提供している。

A大学日本語学科では、漢民族とモンゴル族⁴に分けて日本語教育が行われている。現在、1学年に3つのクラスが設置され、その内、漢民族クラス2つ、モンゴル族クラスは1つである。1つのクラスに学生数は30人程度で、基本的には同じクラスメンバーの持ち上がりで進められる。学生数は年々増加してきていたが、2010年から安定してきている。この学生数は内モンゴル自治区では最大である。

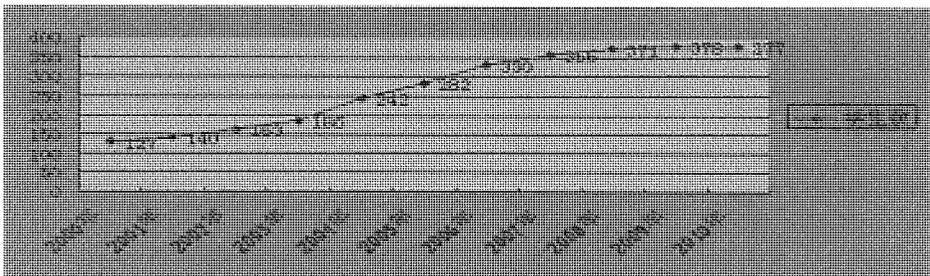


図1 A大学日本語学科における日本語学習者数の変化

3.2 調査協力者

本研究の調査協力者は中国内モンゴル自治区に位置するA大学日本語学科の1年生から3年生までである。4年生は就職活動のため学校にきていなかったため、今回の研究対象者から除外した。また、調査協力者の内訳は表1にまとめた。

⁴ モンゴル族は中国全土に分布しているが、内モンゴル自治区に居住するモンゴル族の人数は最も多く、街中の看板は中国語とモンゴル語との二言語で表記されており、また、大学における教育も、漢民族と分けて行われるところが多い。

表 1 調査協力者の内訳

	1 回生	2 回生	3 回生	計
漢民族	34 人	39 人	26 人	99 人
モンゴル族	28 人	31 人	21 人	80 人
計	62 人	70 人	47 人	179 人

3.3 調査用紙

本研究で使うアンケート調査用紙は3つの部分から構成されている。まずは背景調査である。本研究の目的の一環であるため、調査協力者の親の仕事、学歴、兄弟の有無のような家庭状況についての情報を質問紙に入れた。次はアンケート調査の本文である。本文は文化的興味関心、第二言語コミュニティに対する態度、道具的意識、国際交流、外国語に対する興味、日本語に対する態度、身辺環境、親からの励まし、第二言語における理想像、第二言語習得に関する自信と学習努力の11カテゴリー、計63問から構成されている。この11項目はRyan (2009)を参考に作成した。Ryanの調査法は質問紙調査の一つの有力な方法と見なされているため、本研究では、Ryanに基づいてアンケート調査用紙を作成した。Ryanは日本で英語を学習する学習者を対象に、アンケート調査を行った。アンケート調査は計100問であるが、本研究の中では、日本語学習者の動機づけを検討することが目的であるため、100問の中から、背景調査の37問を除き、動機づけを調査する63問を選び出した。最後は自由記述である。本研究では日本語学習者の学習動機を検討するために、質問紙に「日本語を始めた理由」と「将来日本語を使って仕事している自分をよく想像できる」や「日本人の友達と日本語で話している自分をよく思い浮かべる」といったような「自分像を想像しますか」との2問の自由記述問題を設けた。

4 分析

4.1 信頼性分析

質問紙には以下の表7のカテゴリーを含んだ質問群を用いた。全質問項目にはリッカートの尺度(1強く思う2そう思う3どちらでもない4そう思わない5まったくそう思わない)を使用し、当てはまる程度が強いほど得点が高くなるように、1から5までの得点を割り当て、データを集計した。各項目のクロンバックの α 係数について外国語に対する興味」という項目以外は $\alpha > 0.7$ 十分な信頼性を得ることができた。「外国語に対する興味」という項目については今後検討する必要がある。

4.2 全体の動機づけの傾向

まず、漢民族学習者とモンゴル族学習者をあわせた全体的な傾向を見る。

表2 日本語学習者の動機づけの傾向

項目	M	SD
文化的興味関心	3.92	0.59
第二言語コミュニティに対する態度	3.73	0.68
道具的意識	3.61	0.58
国際交流	4.14	0.69
日本語に対する態度	3.65	0.72
身辺環境	2.79	0.64
親からの励まし	3.33	0.77
第二言語における理想像	3.92	0.70
第二言語習得に関する自信	3.21	0.73
学習努力	3.74	0.63

表2が示しているように、全体傾向として、「身辺環境」(M=2.79, SD=0.64)の変数だけは中央値の3を下回っており、その後に「第二言語習得に関する自信」(M=3.21, SD=0.73)と「親からの励まし」(M=3.33, SD=0.77)が続いた。「身辺環境」は学習者の周りが学習者にどれほど影響を与えているかを測る項目であり、「身辺環境」は中央値3より低いいため、学習者の周りには、日本語学習が大事だと思っている人が比較的少ないことを意味している。また、「親からの励まし」は中央値の3程度であり、学習者の学習動機に親の励ましが非常に大きく関与しているわけではないことが分かった。成田(1998)は学習者が周りから影響を受け、学習を始めるという誘発志向が学習者に影響を与えると述べているが、本調査では、学習者は周りからそれほど影響を受けていないことが分かった。また、すべての変数の中で、「国際交流」(M=4.14, SD=0.69)が最も高く、その後に、「第二言語における理想像」(M = 3.92, SD=0.70)と「文化的興味関心」(M=3.92, SD = 0.59)が続いた。従って、日本語学習者にとっては、日本語を学習して、日本人と交流したい意欲が高く、また、日本語学習者は日本の社会や文化などに高い関心を持っている統合的動機づけが高いことが分かった。

次に、自由記述で挙げられた理由を見ていく。

表3 自由記述をカテゴリー化した結果

順位	内容	人数	割合(%)
1	日本のアニメ、歌や文化などに興味がある	58	32.2%
2	日本語や日本という国が好きだ	45	25%
3	日本へ留学や旅行に行きたい	43	23.9%
4	本人の意志に関係なく日本語学科に配属された、第一志望は落ちた	40	22.2%
5	将来、就職のため、言語は就職に有利、日系企業で働きたい	40	22.2%
6	外国語に興味がある、言語学習がすき	34	17.3%
7	気まぐれ、英語以外の言語を学びたい、数学はいやだ	21	11.7%
8	新しい言語を学ぶことは楽しい/素晴らしいことだ	17	9.4%
9	家族や周りの影響	15	8.3%
10	日本は国際的な地位が高い、技術などは発達している、日本は先進国だ	14	7.8%
11	自分磨き	10	5.6%
12	日本のいいことを吸収したい	10	5.6%
13	日本語は学びやすい	6	3.3%
14	外国人とコミュニケーションを取りたい、日本社会へ溶け込みたい、日本人とコミュニケーションを取りたい	4	2.2%
15	言語学習に才能がある	4	2.2%
16	充実した大学生活を送りたい、内モンゴル大学に入りたい	4	2.2%

表3から分かるように、日本語学習者が日本語学習を始めようと思った理由は多岐にわたっていることが分かった。また、日本語学習者が日本のアニメ、歌や文化などに興味があって日本語を始めたという志向が高いことがアンケート調査の結果と一致している。

その一方で、「日本へ留学や旅行に行きたいや就職に役立つ」といった日本語をあくまでも道具として学ぶ志向も日本語学習者の学習に影響を及ぼしていることも分かった。また、「本人の意志に関係なく日本語学科に配属された、第一志望は落ちた」や「気まぐれ、英語以外の言語を学びたい、数学はいやだ」といったような消極的な動機で日本語学習を始めた学習者も多く存在していることも分かった。

4.3 漢民族の動機づけの傾向

本項では調査対象半数以上を占める漢民族学習者の動機づけを全体の傾向と比較・対

照して顕著な傾向を考察する。

表4 漢民族学習者の動機づけの傾向

項目	M	SD
文化的興味関心	3.85	0.58
第二言語コミュニティに対する態度	3.66	0.63
道具的意識	3.55	0.55
国際交流	4.14	0.66
日本語に対する態度	3.68	0.70
身辺環境	2.63	0.55
親からの励まし	3.17	0.79
第二言語における理想像	3.91	0.69
第二言語習得に関する自信	3.05	0.65
学習努力	3.71	0.59

漢民族学習者の動機づけの傾向は全体の傾向に似ている。「日本語を学べば、新しい出会いが増えると思う」や「日本語がうまく喋ればより多くの日本人と知り合えるだろう」と「国際交流」の平均値 (M=4.14、SD=0.66) は全体の平均値と同じであり、日本語を使って外国人と交流したいという志向が高いことが分かった。また、「将来海外旅行をする時に、日本語が役に立つ」や「日本語は将来就職に役立つ」といった道具的志向の平均値 (M=3.55、SD=0.55) は中央値の3を超えており、学習者は日本の文化などを楽しまたいと同時に、道具の一種として、日本語学習をしていることも分かった。また、「自分の周りには外国語を勉強するのが時間の無駄だと思っている人が多い」や「今の私の環境では日本語がそんなにできなくても構わない」といった身辺環境志向の平均値 (M=2.63、SD=0.55) は中央値の3を下回っており、漢民族学習者の周りには外国語学習が大事であると思う人が少ないことが分かった。

表5からも漢民族学習者は学習志向が多岐にわたっており、「日本語や日本という国が好き」と言ったような統合的動機づけと「日本へ留学や旅行にいきたい」といったような道具的動機づけと両方を持ち合わせていることが分かった。また、「家族や周りの影響」と答えた人がわずか4人であり、学習者は周りからそれほど影響を受けていないことはアンケート調査の結果と一致している。また、「日本語は学びやすい」と答えた人が1人であり、中国語と日本語は文法や発音などがかけ離れているからだと考えられる。

表5 漢民族学習者の自由記述をカテゴリー化した結果

順位	内容	人数	割合(%)
1	日本のアニメ、歌や文化などに興味がある	40	22.3%
2	日本語や日本という国が好きだ	31	17.3%
3	将来、就職のため、言語は就職に有利、日系企業で働きたい	23	12.8%
4	本人の意志に関係なく日本語学科に配属された、第一志望は落ちた	22	12.3%
5	日本へ留学や旅行に行きたい	20	11.2%
6	外国語に興味がある、言語学習がすき	15	8.4%
7	気まぐれ、英語以外の言語を学びたい、数学はいやだ	11	6.1%
8	日本は国際的な地位が高い、技術などは発達している、日本は先進国だ	17	9.4%
9	新しい言語を学ぶことは楽しい / 素晴らしいことだ	15	8.3%
10	家族や周りの影響	4	2.2%
11	自分磨き	4	2.2%
12	日本のいいことを吸収したい	4	2.2%
13	言語学習に才能がある	4	2.2%
14	充実した大学生活を送りたい、内モンゴル大学に入りたい	3	1.7%
15	外国人とコミュニケーションを取りたい、日本社会へ溶け込みたい、日本人とコミュニケーションを取りたい	3	1.7%
16	日本語は学びやすい	1	0.6%

4.4 モンゴル族学習者の動機づけの傾向

本項ではモンゴル族学習者の動機づけの傾向を全体の傾向と比較・対照して、顕著な傾向を描き出す。

表6 モンゴル族学習者の動機づけの傾向

項目	M	SD
文化的興味関心	3.99	0.60
第二言語コミュニティに対する態度	3.81	0.74
道具的意識	3.67	0.61
国際交流	4.13	0.72
日本語に対する態度	3.60	0.76
身辺環境	3.00	0.69
親からの励まし	3.53	0.69
第二言語における理想像	3.94	0.72
第二言語習得に関する自信	3.41	0.77
学習努力	3.78	0.67

モンゴル族学習者の動機づけの傾向も全体の傾向と似ているが、「国際交流」と「日本語に対する態度」の2項目以外の項目の平均値は全体の平均値を上回っており、モンゴル族学習者の動機づけの高さを表している。各項目の中で「国際交流」(M=4.13、SD=0.72)が最も高く、モンゴル族学習者にとっても日本語は出会いを増やす手段の一つであると考えられる。また、全体の動機づけの傾向の中でも、漢民族学習者の動機づけの傾向の中でも、平均値が中央値の3を下回っているのに対し、モンゴル族学習者の「身辺環境」の平均値(M=3.00、SD=0.69)は中央値3であり、モンゴル族学習者は漢民族学習者より、周りから影響を受けて日本語学習を始めたと言える。

表7を見てみると、モンゴル族学習者が日本語を始めようと思った理由の中で、漢民族と違って、「日本へ留学に行きたい」と答えた人が最も多く、漢民族学習者が日本語学習を始めようと思った理由の中で1位だった「日本のアニメ、歌や文化に興味がある」が3位だった。また「将来、就職のため、言語は有利だ、日系企業で働きたい」と答えた人も多かった。従って、モンゴル族学習者が日本語学習を始める際に、日本語を道具として学ぶという道具的動機づけがより影響を与えていると言えるだろう。また、「日本

表7 モンゴル族学習者の自由記述をカテゴリー化した結果

順位	内容	人数	割合(%)
1	日本へ留学や旅行に行きたい	23	12.8%
2	外国語に興味がある、言語学習がすき	19	10.6%
3	日本のアニメ、歌や文化などに興味がある	18	10.1%
4	本人の意志に関係なく日本語学科に配属された、第一志望は落ちた	18	10.1%
5	将来、就職のため、言語は就職に有利、日系企業で働きたい	17	9.5%
6	日本語や日本という国が好きだ	14	7.8%
7	新しい言語を学ぶことは楽しい/素晴らしいことだ	12	7.3%
8	家族や周りの影響	11	6.1%
9	気まぐれ、英語以外の言語を学びたい、数学はいやだ	10	5.6%
10	自分磨き	6	3.4%
11	日本語は学びやすい	4	2.2%
12	日本は国際的な地位が高い、技術などは発達している、日本は先進国だ	4	2.2%
13	日本のいいことを吸収したい	2	1.1%
14	充実した大学生活を送りたい、内モンゴル大学に入りたい	1	0.6%
15	外国人とコミュニケーションを取りたい、日本社会へ溶け込みたい、日本人とコミュニケーションを取りたい	1	0.6%
16	言語学習に才能がある	0	0.0%

語は学びやすい」と答えた学習者は4人であり、これはモンゴル語は日本語と文法だけではなく、発音も似ていると言われることに関係していると考えられる。

4.5 漢民族学習者とモンゴル学習者との動機づけの比較

本項では民族によって、動機づけに差が生じているか否かについて検証を行う。検証を行うために、アンケート調査で使用した項目をRyanの理論に基づき、統合的動機づけ、道具的動機づけと独立項目に再分類した。文化的興味関心、第二言語コミュニティに対する態度と日本語に対する態度の3項目を統合的動機づけに、国際交流、道具的意識、身辺環境と親からの励ましの4項目を道具的動機づけに、また、第二言語における理想像、第二言語習得に関する自信と学習努力の3項目を独立項目に分類した。各項目において、差があるか否かを検証するために、項目ごとに有意水準5%で対応のあるt検定(等分散を仮定しない)を行った。検定の結果、多くの項目で統計的に差が見られなかったが、統計的に差が見られた項目について、なぜそのような差が生じたかについて理由を考察したい。

まず、統合的動機づけに属する3項目については項目ごとに有意水準5%で対応のあるt検定を行ったところ、統計的に有意差が見られなかった。

つぎに、道具的動機づけの4項目を項目ごとに有意水準5%で対応のあるt検定を行ったところ、身辺環境($t(149) = 3.88, p = 0.000$)と親からの励まし($t(176) = -3.25, p = 0.001$)の2項目の間で差が見られた。漢民族学習者は英語だけではなく、幼少期から日本語や韓国語などの外国語に触れるチャンスが多く、他言語に触れるチャンスが少ないモンゴル族学習者より、日本語を使って出会いを増やしたり、日本語を使って外国人とコミュニケーションを取りたいといった国際交流志向が高くなると推測できる。その一方で、モンゴル族の文化の中で、自分の人生を決める際に、親の意見を尊重する傾向が漢民族より高く、また、自由記述でモンゴル族学習者が日本へ留学や旅行に行きたいと答えた人が最も多く、親の援助なしでは達成できないため、モンゴル族学習者の身辺環境志向と親からの励まし志向が高かったと推測できる。

最後に、独立項目に属する3項目についても同じようにt検定を行った。第二言語習得における自信($t(161) = 2.74, p = 0.007$)に差が見られた。モンゴル語は日本語と似ていると言われており、モンゴル族学習者にとって日本語が学習しやすいと思われる、また、漢民族学習者よりモンゴル族学習者の方が日本語を早くマスターできると現場の日本語教師がよく口にしている。従って、モンゴル族学習者が自信を持って、日本語学習に取り組むことができると考えられる。

5 結論と今後の課題

本稿では、中国における日本語専攻学習者の動機づけの様子を明らかにするために、中国内モンゴル自治区に位置するA大学の日本語学科に在籍する学習者を対象に、学習者の動機づけについて考察を行った。日本語専攻学習者は日本の文化や日本語に興味があるといったような統合的動機づけと日本へ留学や旅行に行きたいといったような道具的動機づけとの両方を持ち合わせて日本語学習に臨んでいることが分かった。また、学習者が置かれている状況や学習者を取り巻く環境や生活環境、または中国の教育制度などが学習者の動機づけに影響を与えていることが、今回の漢民族日本語専攻学習者とモンゴル族日本語専攻学習者の動機づけの間に差が生じた原因だと今回の調査を通して分かった。しかしながら、今回のアンケート調査の結果は表面的に民族という要因が学習者の動機づけに影響を及ぼしているように見えたが、実は学習者の動機づけに影響を及ぼしている要素はさまざまであり、具体的には学習者の親の教育に対する態度や学習者の学習に投資できるレベルなども学習者の動機づけに影響を与えていると考えられるため、今後は民族という表面的な要因にとらわれずに、学習者の動機づけに影響を及ぼす諸要因を注意深く見ていく必要があると思われる。

日本語学習者の動機づけは学習継続や学習成果などに影響を与えており、学習者自身にとっても教育者にとっても軽視することはできず、学習者の動機づけをいかに維持し、高められるかは最も重要な問題であると考えられる。また、学習者が持つ背景により、動機づけに差が生じる可能性があるという今回の調査で分かった。中国における日本語教育では、大学に入って初めて日本語を学ぶ学習者がほとんどであり、彼ら・彼女達が学校のカリキュラムの下で日本語学習をしているため、学校のカリキュラムが彼ら・彼女達の学習において最も重要であると考えられる。しかしながら、生活環境や教育制度などの影響で異なる動機づけを持つ学習者には現在の日本語教育カリキュラムが合っているかどうかについての研究は何も行われていない。そのため、動機づけの異なる日本語学習者に同じ教科書で同じ内容を同じ教育方法で日本語を教えることで動機づけを維持したり、高めたりすることができるかという点についても検証しなければならない。また、日本語教育におけるカリキュラムの作成において、学習者の動機づけは十分に考慮されなければならない重要な要因の一つだと考えられる。

参考文献

- Dörnyei, Z. (1998) Motivation in second and foreign language learning. *Language Teaching*, 31 117-135.
- Oxford, R. L. (1996) Language learning motivation: Pathways to the new century.

- Honolulu, HI: University of Hawaii Press。
- Ryan, Stephen. "Self and identity in L2 motivation in Japan: The ideal L2 self and Japanese learners of English." *Motivation, Language Identity and the L2 Self*. Bristol: Multilingual Matters, (2009) 120-43.
- 郭 俊海・大北葉子 (2001)「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて」、『日本語教育』110号、日本語教育学会、pp.130-139
- 郭 俊海・全京姫 (2006)「中国人大学生の日本語学習動機づけについて」、『新潟大学国際センター紀要』第2号、新潟大学、pp.118-128
- 成田高宏 (1998)「日本語学習と成績との関係：タイの大学生の場合」、『世界の日本語教育』、第8号、国際交流基金、pp.1-11
- 堀越和夫 (2010)「台湾における日本語学習の動機づけと大学の成績との関係—好成績取得者の動機づけタイプの探索—」、『淡江外語論集』15、淡江大学、pp.123-140
- 守谷智美 (2002)「第二言語教育における動機づけの研究動向：第二言語としての日本語の動機づけ研究を焦点として」、『言語文化と日本語教育』2002年5月増刊特集号『第二言語習得・教育の研究最前線：あすの日本語教育への道しるべ』、pp.315-329
- 劉海霞.<基国内日本語教育研究的発言与不足，日本語学習与研究，于十九種外国語類主要期刊十年（1999-2008）的統計分析>，<日本語学習研究>，2009年第5期